

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

新合 建保二年八月十二日

題

秋風 秋露 秋月 秋雨 秋雁

秋虫 秋席 秋花 秋水 秋霜

秋鏡 秋旅 秋忘 秋懷 秋雜

作者

女房 順社院 僧正行意

權大納言源朝長通具 泰義藤原朝長定家

大藏少輔源朝長有家 宮内卿源朝長家隆

右近衛中將源朝長雅經 丹波守源朝長範宗

侍従藤原朝臣光家 皇太后宮大夫俊成女

讀師

誦師

判者

參議藤原朝臣定家

一妻 秋風

左 猪

定家卿

杉と申れら氏乃竹葉と云ふはまゝの田向の秋の初風

右

有家卿

春のさうほいひの秋のさうほいひの風の色か

た乃そ氏の葉葉とせむたひにさ指葉の云とふ

とてはんちうにしく是ふは秋とさゆくとては

秋の初風と云ふは秋の初風と云ふは秋の初風

は乃た治世のことなりしゆは秋の初風

二妻

左 猪

女房

よやをいれおきりけし行若乃中と申えかた秋の初風

右

俊成卿女

秋乃んはかきと云ふは秋の初風と云ふは秋の初風

たうとてはのさうほいひの初風と云ふは秋の初風

おろしく雲をよそと神の文をよそと何と云ふ
風よはよそとくもくやと云ふはくゆるをよ
くをよと申す事少くはうくもをよと
らに云ふ事少くはうくもをよと申す事少
くはうと云ふ事少くはうくもをよと申す事少

三書

左指

家隆初旨

狭葉の人をよそと云ふはくゆるをよと申す事少

右

雅經初旨

今より此葉の中葉をよそと云ふはくゆるをよと申す事少

人をよそと云ふはくゆるをよと申す事少
むらゆきくもくやと云ふはくゆるをよと申す事少
秋風をよそと云ふはくゆるをよと申す事少
おろしく雲をよそと云ふはくゆるをよと申す事少

田舎

丸勝

僧正

うらなひをよそと云ふはくゆるをよと申す事少

大

通具御

病けは神もよそと云ふはくゆるをよと申す事少
あはれは神もよそと云ふはくゆるをよと申す事少

つばらねやうととさ外山よりしらなまをゆる
あまこころみとく人進ま志のし村うも
ふあうさふ小ゆきと松の左為勝

五番

七勝

範宗初信

彦早れ妻初秋乃よひそつる風のそとる鶴はら

六

光家

ういしり村葉につもそ風のそとる鶴はら

左方む宜仍為勝

六番

枯齋

左勝

泰隆初信

し女子神より山乃玉来はらみそてあひく村のうら

七

無具卿

矢田新を金づく浅草よりあそく白くもあを吹風うな

丸弁とそらあつ村より山乃玉よりらみあれ

あまこころみとく人進ま志のし村うも

ふあうさふ小ゆきと松の左為勝

つばらねやうととさ外山よりしらなまをゆる

あまこころみとく人進ま志のし村うも

ふあうさふ小ゆきと松の左為勝

くさくさゆふゆふん

七歳

左 猪

僧正

秋さぬと風はれとや、髪もくんとくんとぬ、髪も玉もくんとくんと

右

光家

本間より名はく、髪はうけりて、髪はそむり、髪は乃々露

たひらとぬ、髪は玉もくんとくんと、と髪家、髪は同

まとも、髪はくや、くや、髪は白くみし、髪はくや、くや

くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや

くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや

八歳

左 猪

女房

小山田れり、乃乃庵、髪はくや、くや、髪はくや、くや

右

範宗朝臣

秋さぬと、髪はくや、くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや

た、髪はくや、くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや

おかし、髪はくや、くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや

九歳

左

定家卿

髪はくや、くや、髪はくや、くや、髪はくや、くや

右勝

雅經朝臣

若くは秋乃とらも秋風の人も志す秋の神も又も
左の志はふもらうとらと女もこれと女も
もらうとらと女もこれと女もこれと女も
なくも勝ゆえ

十妻

左勝

五家郷

夕さすは秋乃とらも秋風の人も志す秋の神も又も
右
俊成御女
もらうとらと女もこれと女もこれと女も

十一妻 秋月

左勝

雅經朝臣

大くは秋乃とらも秋風の人も志す秋の神も又も
右
女房
もらうとらと女もこれと女もこれと女も
たうとらと女もこれと女もこれと女も
もらうとらと女もこれと女もこれと女も

中人知てゆきハ花勝とやへくゆらん

十二番

さ勝

通具口

秋半さう紀をそ種よつと余なれぬ月落のまふ

右

範宗約長

夕よの雲霞をひし秋風乃ともいふり心のとまぬ

たう紀をも神よなとて久おりひ入あゆよ

や右をあら海あらさあよりとみとて人と共

ふふゆくこいんさ心のとまきくやゆらんを

心た為猪

十三番

せ猪

家隆朝臣

ゆききて君とおおけ里を我衣よ八月よりぬき

右

定家口

ゆきんごころぬ者盤乃心人をさすおとらん月の影

たすけうたらんさあふゆきこむを猪

十四番

左勝

僧正

鶺鴒乃らん指かおとひんてよもさる月のいそりらん

右

俊成御女

君と林と月也ひりりこあ代めん坊らのいさよのきさうかきも
たをよひくたやう乃姿こと葉もいんらう
魚にた君と林と月とんんえら遊こあゆふ
とけお老とくけくすかうん事いんん
らんえら遊ゆふねんた為勝

十六番

左勝

有歌口

月をぬも我世八十の月之雲れあきく照と林のん代

右

光苑

久雲れ清よみそ秋風月も老枝みうらこまう

左すくも直んもさう津とわんれりり
らんかうんたみさうの月をら枝りよきて
清よこりよこ葉よつてあゆめゆる久うここと

十六番 秋風

左拈

僧玉

いとくれ月約ひのあさうらよたしくぞく秋乃拈とえん

右

雅經胡長

風すく相乃為葉も秋とえて定あうこよれ林の村ぬ

右奇 空階雨橋為葉定深たすといへんたこ

あつたけのこころおのひいしつとせと極へあつ
さまじくゆきとたき月も山よりひみ浅草
生も又おもしろき事ありそらんよまのしとせ
いおのしづかき事しよやゆえん
十七妻

定家口

花それれ衣のなをけしきけしきふたひく秋のひら
人いふに拂ふぬ新乃さうれたきなるるのきそけし
た衣のなをさうしきしきとひるさうしき

木猪

通具御

まわゆるんた雨滴梧桐山館秋も又なる系
宗のりふひとふか下りまけぬ乃をといふ
ふりまじくせえゆきハ殊為勝

十八妻

丸勝

家隆胡后

秋半と新ハ乃木葉つとせなうしつとせぬ新の封ぬ

丸

範宗胡后

物かく一葉つらる根系あふしと封ぬのまろさき
たしとふか事ゆきゆきといひまうしてせえ
ゆきもたも申うにとんえふけ落葉あふり

かさりの高申せりたらんやうにいとほしき
杉さうとゆうとわがを眞守之ゆきハ為勝

十九妻

左

女房

文殊神之本乃下落やうかえん風よまきく林のじり

右

有家

日くしれなく夕暮れうれ雲日村ぬそく暮乃下落
文殊神之本乃下落やうかえん風よまきく林のじり
なぐ夕暮れ深まをそゆらうよひつひらさ
まのゆき氣みうらん花のくさきハ為勝

北妻

左

光家

志不れぬ庭も難も林のな乃ちうとつたぬ村ぬ

右

俊成御女

風千歩に窓の板木れ村ぬのともぬりもろ麻の家式
秋乃なまふうとつたよこけもくさ
さうに叶とゆやけとゆん云下にいふひな
くみゆきもぬりもろを村ぬ
とゆきとわれちうもへつる勝ん
はらん

廿一妻 秋雁

右

俊成卿女

松風乃秋よいそとそくにやとれ愛のこねるる金

左

家隆朝臣

るうねの空の中をわめぬ枕よりすすむ定乃月影

伏見れ愛ゆきくありとほさるゑや久経奉

いにしへの名所ありそとそとそとそとそとそとそと

ゆきは影乃へ金をのりてゆきしゆきしゆきしゆき

にうきうきうきうきとたうきうきうきうきうき

廿二妻

丸勝

女房

誰とあはらる秋風乃とほさるゑと涙とおはらる秋風の考

右

通具

秋よけぬ夜より秋風をきかたつとととととととととと

右乃名なりとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

いあうとととととととととととととととととととと

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

廿三妻

右

定家卿

けしはるる乃涙やとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

九 猪

僧正

乃翁乃母とて成を思て憂を旁にいくへ詠
たのころとれ涙のあともうらたに高き風
亦とやしくやゆらん大往來成を志の心
心すと成務もかろ矢をうらん誠の先引らぐ
たしくゆれんを猪

廿 田妻

左持

範宗胡信

心も乃と娘らん乃翁乃友といふは若れ胡^秋方

廿 六

乃妻

秋乃乃風まふひて誠をう誰とあじれは乃ん
右奇詞ゆにいとる成乃乃翁乃秋翁
乃友といふは乃翁乃友といふは若れ胡方
心も乃と娘らん乃翁乃友といふは若れ胡方
心も乃と娘らん乃翁乃友といふは若れ胡方
心も乃と娘らん乃翁乃友といふは若れ胡方
心も乃と娘らん乃翁乃友といふは若れ胡方

廿五 妻

乃 猪

雅經乃

乃翁乃母の泪も乃と娘らん乃翁乃友といふは若れ胡方

右 光東

いかにいふに遠くあるは侍のつゆも本末の味乃存る
たうに話と紫らうらとらる思あひして宣
下をゆめ進た梢乃秋世の居るさよふんれ
同くさぬれ是の今すしえなうらとぬす
わししやゆらんさみとよあふけあるなとを
みうらなあゆらまやんとくはた為務

母六歳 秋虫

さ 女房

秋乃世の尻花吹らる風のうらまあるさ定あぬ世に

右 有教郷

秋乃世れとて世人のこととありわやと社よ病乳つ
妹は世の世ありさ定あぬ世に世に世に
らあらしとて世人のこととありわやと社よ病乳つ
とらと世に世に世に世に世に世に世に世に世に
世に世に世に世に世に世に世に世に世に世に

母七歳

左 僧正

とらと世に世に世に世に世に世に世に世に世に世に

家隆胡

舞衣の裾を枕のさへに敷きかきしむるも
おのれにやうなれおのれにやうなれ
いとおうくまきしむるも
おのれにやうなれおのれにやうなれ

北八番

さし緒

通具に

おのれにやうなれおのれにやうなれ

左

光家

秋の浅茅の系のを枕に乃を造りて
おのれにやうなれおのれにやうなれ

北九番

さし緒

雅経朝臣

月影うつるぬ里もなぐされおのれにやうなれ

右

範宗朝臣

手の上れにやうなれおのれにやうなれ
おのれにやうなれおのれにやうなれ

車にやうなれ

北十番

左

定家朝臣

あやめをいよててててててててててててて

右勝

後成郷女

うのちをぬれぬとてふとれ若き道うととれ若乃夕暮
おかしと満るもれふかたてと蓮と寄も
たはしけ勝るあやゆらん

三十一番 秋麻

左勝

女房

ふ室山下茶うけて形く麻の夢より志けく暖せんは
たふんかきりて家隆胡信
あひまひ思ひやうく神さひたふ室れり麻と鳴る
たはあ首みじらふ下竹うけあは麻乃とて人らハ

今すこし優れとて人せハ勝とて人くやゆらん

三十二番

左持

道具

昔ありふとれ松原を風をてそよなうとれ若送あり

右

雅經抄下

おのひふもをよ鳴る麻乃た然りた時と秋乃夕暮
たうた時と秋の夕とてと直ハ夢えとてと
じうおのふと痛きとてとあらしゆり
ゆりハ持よとてとらん

三十三番

せ

光家

久りたる麻の浅草生衣あまの麻と書たまふと云ふ

右勝

有家口

あつらふのどれう州あつらう枯て人やごとあ小男麻丸

色えたる麻草より又麻丸はるたふと云

ありと入つこととれう茶あつらうの道あ

直つことえゆれと勝と入る

三十回中敷

左勝

範宗朝臣

対してあまのしうの整あてこととれ林乃夕の村人あつらん

おた

後成郷女

眼もたまる髪れ麻乃暮夕夕とほり此書れ中うれあ

こと麻乃らうり秋草はる魚おれしうはゆよを

とくことたをとる紫つことひしうとあ直り

えゆれは為勝

二十五毒

たさ勝

僧正

秋山乃と麻の中をたを西旁よゆえん夕夕書れ

たか

定家口

胡かく本紫ういりひ唱麻のととる此林乃らうを

大正とてはと母々ゆきハ左為勝
二十六番 秋花

九 栢 女房

神乃氣氣乃高こいりてきりて落も花と枯風と

三 右 僧正

嘆息ありては此の小萩原つるふ麻と今うぬらん

女首とてよ優めこころえとてハ為栢

二十七番

別 左 定家公

旗衣ひもろく花乃つらけに遠里小聲の河さるる

右 勝 俊成卿女

ぬきてかほ種下地あるは露の冬もみか枯乃萩花指

女 左 花と柳しん日さるあまのうら若旁とけ

あまの事たりてやせのゆらん右作者定

てゆらん優小ゆきハ為勝

二十八番

左 勝 通具公

なつてはうはる露まわさるぬをれえと小萩と成らん

女 光家

小萩さる花すの衣ういりひぬをれとらや花れ物つは

大下句下とんえんえんら後しも胡麻あうん
ことなよとゆるうた尾花の末代秋少成以
えんとしんろ奇成あひ事花の枝ことり
このゆるくく雪えええ進ハ花為勝

三才九妻

丸

家隆胡臣

あふふし舞人海向ふと今昔ぬ露の若を春河の秋

大猪

範宗胡臣

やそりばつ月いふこもさうしてい生あふ社と蘇う花さう
たどたがくゆるとすとすこしゆなま進してゆるく

大月とつとこもさうしてい生あふ社と蘇う花さう

いと取づく優れつとゆるさハ為勝

四才妻

を 有 家 郎

羽霧よ花乃あひをさあまを今さうに舞人乃夕音

大猪

雅經胡臣

秋風よ吹らちをぬ露しけと袖をとをいひる蘇系

たとけのよをれへとゆる又ゆえとくしゆると

右社とをさうさういひる蘇系とてらとゆるく

笑とて人進ハ為勝

四十一番 秋水

左勝

僧正

五田川を流るる水系れらるる水はもとをたるとありて井や池を

右

範宗朝臣

水を分て流るるとん秋山乃水系ありて谷れ下は

水はもとをたるとありて井や池を

水はもとをたるとありて井や池を

四十二番

左勝

家隆朝臣

山乃水はもとをたるとありて井や池を

右

有教

大井川志の川にれ紅葉ももいれありての山乃水

大井川志を流るる水はもとをたるとありて井や池を

あまの川にれ紅葉ももいれありての山乃水

水はもとをたるとありて井や池を

四十三番

左勝

通具卿

おのひて生田乃杜の秋風は川をすそぬ水や文ゆらん

右

光家

水はもとをたるとありて井や池を

うらもも枯乃なんこやありふらんやゆらん
左河春ハあく之あふさゆりしやうとく人進きて
為勝

四十五歳

左

定家卿

秋風乃を吹くくも岩乃戸もたのふえさうくすあるら水

右

雅経胡正

喜相川開乃あはれ新きてあふ多治の木の流りと
たう多治と秋老らたつと中とくもいふらん
ゆりぬむ為勝

四十五歳

左

女房

人らも板井の清水里に流るしつとつとくもいふらん

右

俊成御女

小倉山あはれやまう大舟のよもれ流る木の目数を
あそく白くもふんありしやうとく人進む為勝

四十六歳 妹霜

左

女房

まら紫ハあう之ゆりしと重老のまらけ松よ秋風を吹

右

光家

四十九番

左

定家

秋の夕小浦をりてこれおどろきとせりし竹のそけもさる

右傍

有家卿

霜白くぞは唐のさすくら一夜は秋の末をさる

左をけりて葉は静くは詞の約をへしとて枕

いとよきも秋の葉をたれよゆるは晴ゆるん

みす番

右

毎々

ひあしぬ言れさるひ小おそとくはひさし麻乃と夜

左

範宗朝臣

山里の音をのさるも住しぬ物おろしは長月乃そ

左は万葉の古風をよみしはたは九秋をさる悲

しむ姿詞をよみしはたは九秋をさる悲

そ難ゆるぬん左お似しはたは九秋をさる悲

五十一番 秋院

右

長家

君代ちれは秋院をよみしはたは九秋をさる悲

左

僧正

君代ちれは秋院をよみしはたは九秋をさる悲

あそとていひきあはれあはるるいかに
ともゆくくくくくくくくくくくくくくく

みすく

左持

定家

あそとていひきあはれあはるるいかに

右

範宗

あそとていひきあはれあはるるいかに

あそとていひきあはれあはるるいかに

あそとていひきあはれあはるるいかに

みすく

女房

あそとていひきあはれあはるるいかに

六勝

家隆

あそとていひきあはれあはるるいかに

あそとていひきあはれあはるるいかに

あそとていひきあはれあはるるいかに

みすく

みすく

左

光家

あそとていひきあはれあはるるいかに

右勝

通具卿

若代から此杖風まとうつ神乃ま人の杖をそめん
た乃代若くけよは杖の衆の衆のあま
よれあまそよめれそよめれそよめれ
そ難あまた乃若勝と人あなそよめ
みすま

左持

雅野胡長

神風やみそすもいれ夕波のそせ杖の群とつこせ
あめはられそけし神乃こよめそせの杖我志のそ
俊成に女

右

たハ優日たハらういしりさるもい人ハハ又
おれく社とや中へくゆん

五十六番杖旅

左

定家卿

あまの里のそよめれおのよりおとく種乃あまそよめ
た勝 家隆胡長

杖を本もいれあま此乃杖とけ整りし社もつあ
あまそよめれ山鳥とんら事ゆり茶もあ
あまあまあまのたうくゆりゆりゆり
五十七番

右持

通具に

初めふ社をこころほおとあへ乃て山を清くして

と

雅經初に

月よ移るれ中ふをくにあれ向程の林乃れを

万葉のあへ乃て山を清くして山を清くして

れ中ふをくして又り年をたれり清くして

もおのひの初をくして山を清くして

らん

五十八歳

右持

女房

初めふ社をこころほおとあへ乃て山を清くして

右

範宗初に

東海やあへれ山を清くして山を清くして

橋渡川乃れ林乃て山を清くして山を清くして

こえや山の色はくともみくまをれりこれを

初めふ社をこころほおとあへ乃て山を清くして

初めふ社をこころほおとあへ乃て山を清くして

五十九歳

と

光家

うらとぬや娘の愛は社風はくともみくまをれりこれを

大勝

僧正

ゆりてん経をいはずとてあめするなり此の杖風を吹
た初め文字の終えらへら此杖風より里も
びすいみくれ物やゆらん心落乃すうらま
此は松葉おとしゆくまゝゆきむ為務

六十番

大指

有家

ふり望み志のやいふ信まことりや杖の風乃とりに
大 俊成御女
右は乃まゝふそれと流もなり沙間乃とれ杖の芳の香

左とらや杖乃とらと東の濱をゆらん左
れまゝとらととことたらぬん此とらとら
同く杖乃ゆらん

六十一番 権意

大勝

女房

わらわらや杖乃じり杖乃落ありに心似ぬ人乃を
右 定家
下じまゝの煙るる杖やまみあらんかうら
杖乃じり杖乃落 数日たしくはまらん

色ハ為勝

卷之六十五

六十二番

七 特

光家

さけらう〜かきか若う白露乃重なる今も昔も

右

俊成御女

向新髪ついでゆれこの紫もまじりけりて秋も冬も

しんらるゆりて勝負も分明

六十三番

左 拵

通具江

なまじりてあわらうる今も昔もこれ徒搦月も悔め

右

家隆御女

長くとふ秋乃よれまを徒おひれてい来ぬる夏れよひ

すれつとらう〜にらう〜ぬ月をうらみ夏の

このよひらう〜ちと秋とおひるふんいゆきと

すのけくやゆらん

六十四番

左 勝

僧正

赤雲や別らう〜あれう〜さきもこれことか〜月をさき

右

雅経御女

風じよふ使をほり〜みられへの花をさきこれ露乃下州

たふとも艶り〜う〜空をさき〜

卷之六十五

三十四

風はすまきうららけりて
かたは左為勝

六十七歳

有嘉郷

十人して意とぬ社乃家とすもはるをなすひの秋の夕初イ

右勝

範宗納臣

かたは左は右はあするは秋はるりおれまよおひく
左は優子とて進とたんとたははらしくはる
ゆきハ勝もゆるりくや

六十七歳秋懐

左持

女房

秋も秋月とて斗れと進あり昔は今よはひひきつ

右

雅強納卜

志もさうはれも今より秋乃まゆの身にまをれり
たはれゆりゆらん作者をうけこすんとして
目もさすんかきくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
をゆるり

六十七歳

左勝

僧正

今そあらあめじ軒紫は捨てて病の愈へあつたれども

大

乾隆朝臣

いほふも身と心とさん為のらる花も暗ぬ思ひあつた
大乃のそあつて海邊いとよほく久望え侍を
たそあめじ茶葉也とてあ病のいりら
もとよら程みとらる多くとて進い為勝

六十八歳

丸勝

範宗朝臣

捨ゆくぬも秋風よ年とておひら波の敷そ流れゆく

大

俊成御女

身をとりふれちたる古のゆくことせん菊とさける朝ふか
たさる来りことさよのらああしれもあつた
世もつかとう進いと進たを優りいと進れとて
海をちりさけることすこととてあつたことえ
竹まきとて左為勝

六十九歳

大

有家御

誰かこらんて後身婦もまら身を去るぬれ枯乃たくれ
大

定家

老う身あつた来時と茶枯もたられどひせん長月新

あまの首世お旧老はうごめく人及先人すく
なり於尚齒會まやゆらんしきさうしゆ
じ作者勝ゆえし

七十番

左勝

通具

福あふそをれなるひ乃風をじ林も昔の林かあふ

右

光家

明道如き程著いあそよ聖家也も合んれ林乃しひと
右いふ道もとらんをとし方程なる事れあふ
えらんたを優なるさゆりしひあつたれ

あまの首世お旧老はうごめく人及先人すく

七十一番 秋雜

左

定家

見し川海や林あそをれ波風をすしはの吹よ乃波

右勝

範宗朝臣

鳴乃列世はの林あふそをれはく日とすらんあふらん
右れあそをれはく日とすらんあふらん
仍為勝

七十二番

右勝

女房

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

小太

僧正

吉野の山はあまのつとみはあまのつとみはあまのつとみ

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

七十二歳

小太

通具卿

新清の遠くはれ秋の月表をてらるる松よすし月今よみ

小太

あまのつとみ

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

左より高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

右の山はあまのつとみはあまのつとみはあまのつとみ

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

七十二歳

左勝

雅経卿

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

小太

光家

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

高砂の松よすし月今よみ此尾ふの露や老をうらん

世よりあつたぬといふをみくらしく使し侍り
神子以左為勝

七十百歳

を勝

家隆御下

嵐少く揃ふれ神松露おらしてま代も志ぬ林の文書

右

後城卿女

若少くやちも忠く林の月志れぬ神ふ露やとくらん
左それ代も志ぬ又まよふ後くくらん
へみ大乃り子連忠神ははあやとくらんと
まゑるすししくんえびとや侍らん井介の

なまこまを志侍り福を程すれとぞえ
侍り侍り侍り